



Title	トカチヨフ論考 (1) 《Анархия Мысли》 (思想のアナーキー)を中心として
Author(s)	岩間, 徹; Iwama, Toru
Citation	スラヴ研究, 5, 1-15
Issue Date	1961
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/4952
Type	departmental bulletin paper
File Information	KJ00000113155.pdf



トカチヨフ論考 (1)

—— «Анархия Мысли» (思想のアナーキー) を中心として——

岩 間 徹

は し が き

トカチヨフ論考に入る前に、トカチヨフがバクーニンやラヴロフの革命思想を批判した «Анархия мысли» の内容を紹介する。底本として使用したのは、コロンビア大学の図書館 (Butler Library) の特別閲覧室の書庫に珍藏されている初版本である。

すなわち、

«Анархия мысли. Собрание критических очерков.» П. Н. Ткачева. Издание Журнала “Набат”, Лондон, Типография журнала “Набат”, 1879.

滞米中私はこの特別閲覧室で «Анархия мысли» 初版本をノートに写し取った。写し取る際、必ずしも重要な誤記とはいえないまでも、まま誤記があるので、本稿ではその逐語的全訳は見合わせることにした。しかしトカチヨフの論旨は忠実にあとづけているつもりである。またところどころ見出しをつけたが、それは私が便宜上つけたのであって、原書にはない。なお、原書の文字は旧正字法で書かれているが、本稿で原文を引用する際は、すべて新正字法に改めたことを断っておく。上記の書名もちろんその例外ではない。

本稿の «Анархия мысли» の内容紹介はまだその一部であって、残余の部分の内容紹介は次号に廻す。しかるのち、トカチヨフ論考に入る予定である。

1. はしがきに当る部分「批判の自由」

«Свобода критики» を力説する

冒頭、トカチヨフは、外国で出版されるロシア語の書物、とくに革命書が急激に増加しつつあること、ツァーリ政府の圧迫が加われば加わるほど、革命書の出版が累増していくことに注意を喚起している。だからツァーリ専制権力は革命思想の弾圧をやっているが、それは無益な努力なのだ。革命思想は弾圧に抗して、広い天地 (простор) を求め、自由 (свобода) を望む。革命思想は「牢獄の墓場」から「清い、自由な空気」のなかへはい出す。¹⁾ 「牢番」はいたずらに警戒を倍加し、いたずらに牢獄の墓の扉に石また石を積みあげる。しかしいかに牢獄の壁を厚くしようとも、いかに石また石を積みあげようとも、革命思想を阻むことはできないし、そのゆくてを遮ぎることはできない。革命思想は到るところに滲透する。「いかなる権力も、革命思想を牢獄と和解させ、墓場の

1) «Анархия мысли. Собрание критических очерков» П. Н. Ткачева. Издание Журнала “Набат”, Лондон, 1879, стр. 1

沈黙に慣らすことはできない。国内で革命思想を弾圧すればするほど、国外で革命思想の叫びは大きく烈しくなる。」²⁾

かように、トカチヨフはいかなる権力を以てしても革命思想の根絶は期しがたいという。革命思想は、かれの言葉を借りていうならば「牢獄の墓場から……清い、自由な空気のなかへ這い出してゆく。」トカチヨフが「牢獄の墓場」といっているのは、いうまでもなく、ロシア本国を指し、また「清い、自由な空気」といっているのは西欧諸国の環境を意味している。事実、かれはつぎのように書いている。「諸君はペテルブルク、モスクワ、オデッサ、カザン、キエフで革命思想の舌の根を切り取ったが、革命思想はジュネーヴ、ロンドン、ベルリン、パリで話しはじめた。」³⁾ ロシアで舌の根を切り取られても「牢獄の墓場」を這い出して、西欧諸国の「清い、自由な空気」のなかで、革命思想はまたもやしゅべり始める。ロシア国外でロシア語の革命書がたくさん出ているのは、その何よりの証拠ではないかというのである。

そもそも、いかに人間を片輪ものにし、馬鹿者としても、人間がああしたい、こうしたいと考えるのを根絶できない、とトカチヨフはいう。それならば、さし当って、その「欲求」とは何かといえ、検閲をへない、外国で出版された秘密文献を求めることなのだ。国外で出版された革命文献がロシアで多数の読者を獲得する理由はここにある。そしてこういう文献がロシア社会の知的進歩に絶大な役割を果すこともあきらかなのだ。⁴⁾

「牢獄の墓場」ロシアを這い出した革命思想は、西欧諸国の自由な空気を吸って、革命文献のなかで、大きく、烈しい、叫びをあげる。外国で出版される革命文献はいまのところ「痛めつけられた」ロシア思想の発展のために「唯一の基盤」を提供しているわけで、ロシア思想の発展は、その基盤としての在外文献そのものの状態や性格にいちじるしく依存している。その基盤がより自由になればなるほど、ロシア思想はすみやかにまた華々しく発展する。⁵⁾ そこでトカチヨフは外国で出版される革命文献はどうあらねばならぬかということに言及する。そしてかれの主張したのが「批判の自由」«свобода критики» だった。「思想が求めている自由は、たんに警察の圧迫がないということだけを前提とするのではなく、——最も大切なことは——批判の自由を前提とする。批判の自由なきところ警察の追求のもとにあるよりも、もっと早く思想はしぼみ、しなびてしまう。」⁶⁾ 批判は思想の正しい発展の必要条件で、思想を育て、強化し、活気づける。思想が批判を受けつけないようになると、それは死せるドグマとなり、進歩も発展もなく、老い込み、しぼみ、古びてしまう。以上のような見地から、トカチヨフはその雑誌『警鐘』«Набат» に外国で出版されたロシア語の著作、とくに革命的性格をもった著作にたいする批評欄を設けたというのである。

このような新しい試みが必ずしもすべてのひとつひとつに歓迎されないことはトカチヨフ

2) там же, стр. 1

3) там же, стр. 2

4) там же, стр. 2

5) там же, стр. 2

6) там же, стр. 2

も承知している。革命的文献にたいする批判をやれば、それはいたずらに反目軋轢をもちこもうとする「厭うべき欲望」として片付けられてしまうかもしれない。そういう非難が起こるのは百も承知だが、かれはこの非難を「馬鹿ばかしいこと」また「無意味なこと」だと断言している。⁷⁾ 革命思想を闡明して進歩させること、革命思想を死んだドグマの形骸と化せしめないこと、その誤謬を正すこと、われわれの思想を虚偽・不合理・歪曲から清めること、一体それが革命党を分裂させ、相互に反目させることを意味するのだろうか、と反問する。そして「自己の思想に批判的に立ち向う勇氣すらもたず、その誤謬をあかすみに出せば叛逆だと考え、その見解を公平に検討すれば裏切りだと考えることは、なんという馬鹿げた鈍いひとたちなんだろう」といっている。⁸⁾ トカチヨフによれば「革命思想の解明検討は党を割らず、かえって党の統一を促進し、その綱領を普及させる」というのである。⁹⁾

そこでトカチヨフは外国で出版されたロシア革命文献を批判の俎上にのぼせるのである。トカチヨフがなぜ批判の自由を力説しているか。以上かれが述べて来たところをまとめてみるとつぎのごとくになるだろう。それはまず第一に外国出版の革命文献は目下ロシアの革命思想の発展のために最も重要だという認識、かれの言葉を用いれば「唯一の基盤」だという認識から出発している。第二にそれだからこそロシア革命思想の基礎たる外国出版の革命文献のあり方が問題なのであって、思想の正しい発展のためには「批判の自由」がなければならぬという根本認識に立っているのである。そして第三に「批判の自由」はここ外国でこそ可能なのだ。「われわれ革命家はここで出版の自由のあらゆる便宜を享受しているのであって、もしわれわれがわが革命思想の所産についての腹藏なき意見の吐露を内気に差しひかえるならば、一体誰からそれを聞くことができるのか？ まさか帝政ロシアにおいてそれを聞けるわけがないではないか？」¹⁰⁾ かようにトカチヨフは西欧諸国に亡命せるロシア革命家の責務、外国に在住してこそ可能な、また当然なすべき批判の重要性を強調しているのである。それは単に批評のための批評ではないのであって、ほかならぬロシア革命思想の正しい発展のために必要だと考えているのである。

それならば、どういふ著作を批判の対象としてとりあげるべきか。これについてトカチヨフは、つまり「第一義的な重要性と意味をもつ」著作は、青年に「革命的理念」をあきらかにし、「革命的実践」に関する助言と指示を与えるもので、一言でいうならば、青年にとって何をなすべきかという根本問題が解決されているものをいうのである。¹¹⁾

トカチヨフがとりあげた著作はつぎの三点であった。(1) «Государственность и Анархия» (1873). 本書は「社会革命党」«Социально-революционная партия» が出版したかなり大部の書物である。(2) つぎにあぐべきは、«К русской социально-революционной молодежи» (1874) で、これは雑誌『前進 «Вперед»』編輯局の出版したあまり大き

7) там же, стр. 3

8) там же, стр. 3

9) там же, стр. 4

10) там же, стр. 3

11) там же, стр. 4

くないパンフレットである。最後は、(3) ジュネーブにおける «Община русских анархистов» の綱領で、ロシア革命家にたいする檄文として書かれたものである。

以上三つの著作はおのおの三つの異なるフラクシヨンのいわば信仰告白である。在外のロシア革命家は以上の三派に分かれている。すなわち(1)バクーニ主義者 (Бакунисты) (2)ラヴロフ主義者 (Лавровисты) あるいは『前進』派 (Впередовцы), 最後に(3)ジュネーブの無政府主義者 (Женевские анархисты), 新聞『労働者』 «Работник» の発行者たちである。

一体、以上の三つのフラクシヨンのちがいはなにか。それぞれの世界観にはなにか本質的な相異があるのか。そのことはこれらおのおのの思想の所産を分析することによって十分あきらかになるわけで、トカチヨフは以上三者の思想の所産を順次とりあげて分析している。

2. «Государственность и Анархия» の批判

「政治」を否定しながら「政治」に関心する

«Государственность и Анархия». この書物はいうまでもなくバクーニンの基本的労作のひとつである。トカチヨフはまず本書が非常な勢いでロシア国内に流布し、革命思想の指導に大きな影響を与えた事実を認めている。その影響力が大きいばかりでなく、本書がすくなくとも若干の部分——その全部とはいわない——については偉大な才能を以て書かれていること、またその外形は——内容とはいわない——適度の華やかさと機智に富み、断然他の在外革命文献を圧して一頭地をぬいていることを認めている。

しかしこと本書の内容におよぶと、トカチヨフの批判はにわかには手きびしくなる。本書は論理的な首尾一貫性をまったく欠いた乱雑きわまりないものだというのだ。

トカチヨフはまず第一に本書の全内容が「社会革命党あるいは無政府党」«Социально-революционная или анархическая партия» の根本原理と鋭く矛盾していると指摘する。

「社会革命党」は「政治」«Политика» を否定する。そして国民生活の国家的側面を完全に看過する。ところが «Государственность и Анархия» は始めから終りまでもっぱら種々の純国家的外交的諸問題の考察ばかりである。これらの問題は「ブルジョア政策」に追随するひとつとだけに興味があり、また「社会革命党」の関心となんら共通しない関心を抱くひとつとだけに興味があるのだ。¹²⁾かようにトカチヨフはバクーニンの書物の考察の対象や関心の所在は党の根本原理と矛盾するではないかという本書の内容の一般的批判をまず下だしている。

ドイツ人は生まれながらの «государственники» ロシア人は生まれながらの «анархисты» という説は「大ざっぱな一般化」であること

ところで «Государственность и Анархия» のなかで「唯一の独創的思想」とみなされるのはつぎの点だとトカチヨフはいう。すなわちバクーニンはその著書のなかで「ド

12) там же, стр 5-6

ドイツ人は生まれながらの государственники である。государственность がかれらドイツ人にとってはあらゆる他の欲望以上に重きをなして、これが決定的に自由の本能を押しつぶしている」（《Государственность и Анархия》, стр. 144.）といい、また「政治の優位（политическое преобладание）にたいする伝来の従順と志向はその（つまりドイツ人の）本質の根本的特徴をなしている」（там же, стр. 303）と書いていること、これに反して、スラヴ民族やローマンス系民族——とくにスペイン人・イタリア人——は生まれながらのアナーキストであり、あらゆる государственность や централизация の不倶戴天の敵である。そこでスペイン、イタリアおよびスラヴ世界は最も社会革命に近く、ビスマルクとマルクスとをもつドイツは最も社会革命に遠いと結論していることだという。

この結論は、トカチヨフによれば、機智に富む点がなくもがなだが、それがいいうるすべてであって、まじめにとりあげられないという。これはまったく「おおざっぱな一般化」«широкие обобщения» だ。国民生活のなかから勝手にある一部分を抽出し、それを国民性だとし、いろいろ変った特性だの性癖だのをただ一様の形式にはめこみ、国民全部にたいし簡単に表書きした荷札を貼りつける仕業だ。つまり「軽率」、「堅実」、「放蕩」、「有徳」、「Нация анархистов」、「Нация государственников」等々のレッテルをはるわけなのだが、これらはまったく「気まぐれな一般化」«фантастические обобщения» であり、「気まぐれな一般化」はいとも純粋な詩やレトリクの領域に属するもので、譬喩以上に出るものではないというのである。¹³⁾

かようにトカチヨフはバクーニンがドイツ人は生まれながらの «государственники» で、ロシア人は生まれながらのアナーキストだと論断するのを「大ざっぱな一般化」もしくは「気まぐれな一般化」だと批判し、バクーニンがいろいろと歴史的・政治的考察によってその正しさを証拠立てようとしているが、かれの歴史的論証も政治的思考もあまり信憑できないと述べている。バクーニンは国家の歴史——外交史——の諸事実から出発して、その諸事実の責任をあげて人民（народ）に負わせている。一切の掠奪的傾向や権勢欲は人民の支配者や外交官の特徴であるのに、これを人民の所為にしている。かくてバクーニンは常に種族統一への志向を централизация と同一視し、централизация の観念を государственность の観念と同一視する。種族的分離を децентрализация と一緒にし、この децентрализация をアナーキーの観念と同一視する。このような誤まった歴史的・前提とこのような子供じみた互いに異なる観念の混同の上に立つ結論の価値はおのずからあきらかだとトカチヨフは述べている。¹⁴⁾

バクーニン自身の党綱領を批判の対象とする

そればかりでなく、以上のバクーニンの結論は、バクーニン自身が書いている党綱領となんら関連性をもっていないといって、その党綱領を引用している。トカチヨフはここに圧縮された形で、バクーニンの全哲学が示されているという見地から、以下引用した党綱領の内容を逐一とりあげて、その矛盾をつき、論理的な首尾一貫性のないこと、

13) там же, стр. 7

14) там же, стр. 7

乱雑そのものであることを、時には言葉のはしをとりあげて、意地わるく指摘する。

以下はトカチヨフの引用したバクーニン自身が書いた党綱領である。

「われわれ、革命的無政府主義者、全民衆の教育、解放および社会生活の広汎な発展の擁護者、したがって国家およびあらゆる支配の敵たるわれわれは、形而上学者、実証主義者、また学問の女神の学識ある崇拜者また無学の崇拜者のすべてとは反対に、つぎのごとく主張する。すなわち自然生活および社会生活は常に思想に先行する。思想はただ生活の機能のひとつにすぎないが、しかし決して生活の結果ではない。思想は自分自身の潤れることなき深みから、一連の抽象的反省によってでなく、一連の種々の事実によって発達する。そして思想は、常に生活によって生み出され、決して生活を生み出さないものであって、里程碑として、生活の方向およびその独立のまた本来の発展の種々の段階を指示するにすぎない。

かような信念にしたがって、われわれは小冊子からの借物やわれわれ自身の考察によるところの、いかなる社会組織の理想をも自国もしくは他国の人民に押しつけようとする企図をもたないし、またそんな欲望は些かももっていない。そのみならず、多少とも歴史によって発達せる自己の本能において、自己の現実的要求において、また意識的であれ無意識的であれ、自己の志向において、人民大衆は自己の将来の正常な組織の全要素をもっているのだという確信から、われわれはその理想を人民そのもののなかにも求める。あらゆる国家権力、あらゆる政府は、その本質上またその立場上、人民の外に (вне народа) 人民の上に (над народом) に建立されたもので、人民には無関係の秩序や目的に人民を隷属させようと断乎志さざるをえないのであるから、われわれはあらゆる政府権力、国家権力の敵であり、国家組織一般の敵であることを宣言する。そして独立かつ完全に自由な連合の方法によって、下から上に向って組織せられ、あらゆる公的後見を排除するけれども、しかし種々のまた一様に自由な人々や党の影響を排除しないで、人民自身が自己の生活をうちたてるとき、始めて人民は幸福で自由でありうると、われわれは考える。

以上が社会革命家の信念であり、これに対してわれわれは無政府主義者とよばれている。われわれはこの称呼に抗議しない。なぜならわれわれは事実あらゆる権力の敵だからだ。また権力は権力を与えられたものもまた権力に従うべく強制されたものもともに墮落させることを知っているからだ。」¹⁵⁾

思想と生活との関係

その根本的命題はバクーニンによってつぎのごとく定式化されている。すなわち「自然生活および社会生活は常に思想に先行する、思想はただ生活の機能のひとつにすぎないが、しかし決して生活の結果ではない。」《Жизнь естественная и общественная всегда предшествует мысли, которая есть только одна из функций ее, но никогда не бывает ее результатом》。トカチヨフはまずこの定式を問題にする。《которая …ее результатом.》とあるその《которая》とは何か、また《ее》は何を指すのか。文法的にはこの文章の意味はつぎのようになる。すなわち《мысль никогда не бывает результатом жизни》。《которая》はあきらかに《мысль》を指し、《ее》は《жизнь》を指

15) там же, стр. 8-9

している。したがって前掲引用のさいに翻訳したように「思想は決して生活の結果ではない」となるのである。ところがあきらかにバクーニンは正にその反対のことをいおうとしているのだ。すなわち生活は決して思想の結果ではない、前者は後者に先行すると主張しているのだ。ところでこれを文法上のあやまりだとして、バクーニンのいわんとしているように訂正してみたところで、この定式のもつ論理的意味はおかしいというのだ。バクーニン自身「思想は生活の機能のひとつだ」と確信しているのに、果して生活は思想に先行する、思想は生活の結果である、といえるかどうかだ。思想、より正確に言えば、脳のはたらき、また心臓その他ののはたらきは、人間生活、したがってまた社会生活に先行することはありえないし、また生活の結果ともなりえない。思想は生活の最も心要欠くべからざるまたどうしてもとり除きえない構成部分のひとつをなしているからだ。¹⁶⁾

トカチ ョフはさらに一歩進めて、しかし一体どこから思想はその理論的構成のための材料を借りて来るのかと問うている。勿論、天空からでもなく、自己自身からでもない。思想をとりまいてる生活の事実からである。事実はしかしまたその存在をいちじるしく思想に負っているのだ。もし社会的事実が思想のはたらきに主な内容を与えるとすれば、つぎのようにいうことができる。つまりあらゆる理論は事実の結果にほかならないこと、事実は思想に先行するということである。トカチ ョフによれば、バクーニンはあきらかにこのような考えを自分の根本的前提として表現したかったのであって、たまたまペンの赴くところ、その前提はあらゆる意味、文法的のみならず、論理的意味をも失ってしまったというのである。¹⁷⁾

「この観念は完全に正しく、もうすでに議論の余地なき社会科学の公理となった」とトカチ ョフは書いている。それをバクーニンは「実証主義者」や「学問の女神の学識ある崇拜者や無学の崇拜者」が否定しているかのように思いあやまっている。「なるほど、この観念をヘーゲル学派のドイツ形而上学者は否定しているがトカチ ョフはいう—こんな連中はもうとっくの昔アルヒーフ送りになっているのであって、かれらについて思い出すことさえ、いまとなってはもう恥ずかしいくらいだ。著者は本当にこのことを御存知ないのだろうか？」¹⁸⁾

理論と事実。理論は事実を変えることができないのか

さて、あらゆる理論は事実の結果であり、事実は思想に先行する、という前提——バクーニンがあきらかにいわんとした前提は正にこれだとトカチ ョフはいう——からどんな結論が出されているのだろうか。あらゆる科学的理論は一定の社会的事実の影響の下につくられる。したがって、バクーニンによれば、科学的理論は社会的事実を変えることはできないということになる。しかしなぜそうなるのかとトカチ ョフは反問する。A が B を生んだということから B が A を変えることができぬという結論は依然として出て来ない。それどころか社会生活においては原因と結果との間には常に二重の関係

16) там же, стр. 9

17) там же, стр. 10

18) там же, стр. 10

が存する。原因が結果を生み、結果が原因を変化させる。たとえば人間がある種の食物を工夫する。その食物が今度は人間を変化させる。あるいは一定の社会組織が機械を発明させ、機械生産を開始させる。その機械生産が今度は社会組織を変化させる等々である。人間によって体験されたあらゆる社会的メタモルフォーゼはすべて思想の参加によって成る。たとえ思想そのものは社会の産物にすぎぬとはいえ、思想は絶えず社会を変えていく。¹⁹⁾

ところで、バクーニンのいうように、あたかも思想すなわち科学は生活を変える力がない、なぜなら思想の材料は生活から借りて来るからだということになれば、この結論はどんな意味をもつことになるのだろうか。トカチョフはつぎのようにきめつける。それでは社会生活は未だ嘗て変化しなかったということになると、あらゆる社会生活の事実は社会生活本来の影響のもとにつくられる、したがって、バクーニンの論法によれば生活の改善にせよ、悪化にせよ、一般にその発展に協力できぬということになる。「このような結論は保守的な哲学者にさえ、五等文官ヘーゲルにさえ、あまりに保守的だとおもわれることだろう。」²⁰⁾

「本能的理想」と「意識的理想」

しかし、バクーニンはさきについて議論を変えている。思想、科学は生活を改造することができぬと断定したかれは、そのあとで、生活はあたかも人民の本能——「意識的または無意識的志向」、「人民大衆の現実的要求」によって改造されねばならぬかのように確信している。これらの本能、志向および要求のなかに、「未来の正常なる社会関係の全要素」²¹⁾が存在しているかのごとく確信している。

「一体なんということだ？」とトカチョフは噛みつく。これは常識にたいする嘲弄なのか、それとも読者の頭の悪さを予想しての皮肉なのか？本能といい、要求といい、また志向というのも、これみな歴史の所産ではなかったのか。生活がこれらをつくり、発達させたのではなかったか。然り、バクーニンは人民の本能が「多かれすくなかれ歴史によって」、つまり与えられた社会環境の諸条件によって発達したことを否定していない。それならば、なぜバクーニンは意識的な科学的思想よりも人民の本能に重きをおくのか。人民の本能も思想と同様に、その材料を同じ源泉、つまり人民の生活の諸事実からとて来る。その点では本能も思想も同じだ。それなら本能と思想の相違はどこにあるかといえ、本能は無意識的で、無分別であり、それ故必ずしも論理的でなく、首尾一貫していない。それは手さぐりで、眼かくしされて動く。ところが思想は一步毎に明瞭に理解し、絶えず自己をコントロールし、点検する。はっきり目的をみ、その目的に向ってしっかりとまっすぐに歩き、脇道にそれることがない。もっと簡単にいえば、本能は理性をもたず、思想は理性をもつ。そこでトカチョフは、人民の理想が思想の「磨かれた鏡」よりも本能の「濁った鏡」の方によりはっきり映る理由を説明してもらいたい。なぜ本能的理想は生活を改造できるが、意識的理想は生活を改造できないのかその

19) там же, стр. 10-11

20) там же, стр. 11

21) トカチョフは引用句中「社会関係」«отношения общества»という言葉を使っているが、前に引用したバクーニンの党綱領では「組織」«организация»という言葉が用いられている。

理由を説明してもらいたいと迫まる。²²⁾

「少数者」と「人民」

アナーキストはつぎのように答える。意識的理想はたんに「少数者」*«Меньшинство»* によってのみつくられる。そしてこの「少数者」は人民のそとに (*вне народа*) ある。それにたいして本能的理想は全人民に固有のものである。かくてかれらはつぎのごとく指摘する。すなわち本能的理想は人民のものであり、意識的理想はそうでないと。

この結論はまたまた人間の論理と一致しないとトカチヨフは反論する。理想の人民性 (*народность*) は理想の内容によって決められるのであって、その内容はこれを構成する素材如何による。もしも「少数者」がその素材をブルジョア社会の生活、ペテン師的搾取の世界、商店や取引所やその他の世界からとったとすれば、その理想や理論は「反人民的ブルジョア的性格」*«характер анти-народный, буржуазный»* をもつであろう。(たとえばいわゆる「経済学」*«наука политической экономии»* の理想や理論)。もし「少数者」がその素材を人民の生活——労働の世界、労働者の世界からとったとすれば、その理想や理論は本質上「人民的、反ブルジョア的」*«народный, анти-буржуазный»* となるであろう。(たとえば共産主義その他の理想)。これはまったく分かり切ったことで、改めて主張することさえ馬鹿げているとトカチヨフはいう。²³⁾

ところがアナーキストはあたかも少数者は多数者の志向をまったく理解できず、それをあきらかにすることができないかのように断言する。なぜなら少数者はみずから身を以て多数者の苦難を経験しないからだという。トカチヨフはこれもまた正しくないと反論する。トカチヨフは面白い譬喩で応酬している。「未だ嘗て熱病にもチフスにもかかったことのない医者、果して患者自身よりも、これらの病気の本質や原因、また治療法を理解しあきらかにする能力がないというのだろうか？」²⁴⁾ 勿論、少数の人間、つまりインテリゲンツィアは人民自身が感ずるほどには、人民の苦難を強く「感ずる」*«чувствовать»* ことはできない。「しかし正にその故に」とトカチヨフは主張する。「インテリゲンツィアは人民の苦難をよりよく理解し *«понимать»* それに客観的態度をとり、より全般的にそれを分析し、そしてその世界観においては、おそらくアナーキスト自身が「人民的本能」*«народные инстинкты»* のなかに認めているような不明瞭、混乱、矛盾は存在しないであろう。」²⁵⁾

人民の本能と人民の現実

アナーキストたちは、その哲学において、まじめくさってつぎのように断言する。すなわち「多かれすくなかれ歴史的に発達せる人民の本能のなかに」未来の正常な組織の全要素が存在すると。ところがこの形而上学的な高所から地上へおりて来ると、つまりドイツ人、フランス人、ロシア人その他の現実に存在する本能、要求および志向を分析するにおよんで、かれらはさきの断言と全く正反対の結論に到達しているとトカチヨフ

22) там же, стр. 12

23) там же, стр. 13

24) там же, стр. 13

25) там же, стр. 13

は論じている。たとえば、ドイツ人には「奴隷の本能」«инстинкт рабства» と «государственность» への志向が優勢である、とするならかれらの本能と志向のなかに「未来の正常な社会組織の要素」を求めることはできないではないか。ロシア人はその本能的理想において「三つのよい特徴」«три хороших черты» をもっているという。すなわち(1)土地は全人民のものだという信念、(2)土地を利用する権利をもっているのは個人でなく、мир, община だという信念、(3) община の国家にたいする敵対関係。ところがまたロシア人は「四つのわるい特徴」«четыре дурных черты» をもっているという。すなわち、(1)家長制 (патриархальность) (2)ミールによる個人の吸収 (поглощение лица миром) (3)ツァーリ信仰 (вера в царя) (4)キリスト教 (Христианская религия)。以上のことはロシア人の理想のなかにもまた「未来の正常な社会組織の全要素」が求められないことを意味する。そこでもし人民が自由に妨げられることなく現実生活のなかに理想を実行する可能性をえたとすれば、その結果はアナキスト自身が不自然で正常でないと考えるような社会組織となるであろう。²⁶⁾

以上のようにロシア人民の「本能的理想」のなかに「いい特徴」と「わるい特徴」がある。そこで、一方ではロシアの青年たちに向けて、革命家の事業、すなわち «народное дело» はただ「人民の理想」«народный идеал» の実現にあると断言しながら、他方、青年たちに向けて「人民の理想」なるものは革命家はその理想を正し、一切の悪いもの、正常ならざるものから、その理想を清めるときにのみ「正常なる社会組織」に適合するであろうし、またそのときにのみ実現されるであろうというのである。一体これはどういうことだとトカチョフはその矛盾をつぎのように指摘する。

ツァーリ信仰として表現されるロシア人民の政治的宿命論、ロシア人民の家長制、宗教性、最後にミールにたいする個人の隷属、以上はさきにあげた「四つのわるい特徴」であるが、これらをアナキストたちはいかなる基準の上に立って悪いもの、また正常ならざるものと認めるのかとトカチョフは反問する。そしてトカチョフはつぎのように主張する。この基準は「人民の意識の内部から」借りて来たものでないこと、また「人民の本能や志向」の上に立っていないことは明瞭ではないか。それは科学そのものから偏見とは没交渉の、少数者の意識的な思想、つまりかれらアナキストが軽蔑する少数者の思想から借りて来たものなのだ。²⁷⁾問題は「未来社会の正常なる組織のあらゆる要素」は人民的理想、人民的本能のなかに存するか否か、その二者択一である。前者の場合だと、人民的理想がより完全に実現されれば、人民的本能が自由なる発達に任せられれば、それだけいいということになる。後者の場合はその逆である。すなわち完全なる人民的理想の実現、人民的本能の無障碍な発展によって正常な社会組織が招来されるのは人民的理想が清められ、人民的本能が再教育された場合に限るのである。これは二二(ににん)が四というほど明瞭である。ところがアナキストにとってこのことは明瞭ではないのだ。かれらは人民的理想の神聖不可侵を遵奉し、所与の正常ならざる社会組織を正常なる社会組織にとりかえようと欲するのである。²⁸⁾

26) там же, стр. 13-14

27) там же, стр. 14

28) там же, стр. 15

革命的实践・準備の道とブントの道

然らば何をなすべきか。トカチヨフはこの問題にたいする解答を綱領、つまりアナーキストがわれわれ革命家に推せんする実践綱領のなかに求められないだろうという。

青年に現実の革命的实践を説明するに当って《Государственность и Анархия》の著者は「一般に無秩序な思想から現在分泌している」二つの主なる傾向、かれの意見によれば、お互に相反する二つの傾向のあることに注目している。

ひとつの傾向はより穏和なそして準備的な性質（более миролюбивое и подготовительное свойство）のもので、もうひとつの傾向は「戦闘的、ブント的」《боевое, бунтовское》なものである。前者の傾向の擁護者は、とバクーニンはいつている「革命の現在の可能性《в настоящую возможность》（おそらく著者は《в возможность в настоящем》といたかったのだろうとトカチヨフは註記している）を信じていない。」さればといて、「人民の不幸の静かな見物人」《покойные зрители народных бед》にとどまりたくないので、人民のなかへ入ってゆき、人民とともに働きながら、人民の間に「結合の精神」《дух общения》を普及しようとしている。（стр. 18）

かれらの目的は、人民を革命に向って準備すること、「正義、自由、そして解放手段」《справедливость, свобода и средства к освобождению》を実際に理解させるまで人民を育てあげること、人民の理想を正し、清めることである。著者（バクーニン）はこの目的をユートピアだと考えている。「かかるプランを心に抱き、衷心からこのプランを実現しようと意図するものたちは、疑いなく、わがロシアの現実のあらゆる畸形を見まといとして眼をふさいで、これをおこなっている。そもその実行の初めからかれらを捉えるおそるべき重苦しい幻滅を前以て予言することができる。なぜなら、ごく少数の幸福な場合を除いて、かれらのなかの多くのものは始めからさきへ進まないだろうし、また進むことができないだろうからだ。」（стр. 19）

「準備の道」を否定しながら「準備の道」を説く

緩慢な、漸進的準備の方法、宣伝の道は、著者（バクーニン）によって、決定的に拒否されている。しからば青年は何をなすべきか？とところがおどろいたことに、著者（バクーニン）は宣伝、準備、人民のなかに《дух общения》を発達させること、これをやれというのだ。たったいま著者はその必要のないことを証明したばかりではないか、一体こんな乱暴な、あからさまな前後撞着がありうるものだろうかとトカチヨフは長嘆息する。²⁹⁾

「わが人民はあきらかに援助を必要としている——わが革命的青年の援助を必要としている。」——と著者（バクーニン）はいつ。トカチヨフは人民を自分の神とするひとが口にするにしては、これはちよつと妙な告白だと皮肉っている。『付録 A 《Прибавления A》の 9 頁に著者は「最も有名な天才と雖も」人民のために何事もなしえない。なぜなら「人民の生活、人民の発達、人民の進歩はもっぱら人民自身に属するからだ」というようなことを断言している。さらに 10 頁には、人民にとって「特権階級から期待すべきものは何もない」と割切っている。そういつておきながら突如として人民はわれわれ

29) там же, стр. 16

の援助、革命的少数者、特権的少数者の援助なくしては何事もなしえない、われわれの援助は人民にとって不可欠だなどという。よろしい、それではひとつ説明をきいてみようではないか。われわれの援助はなんのために必要なのか？

「人民は非常にひどい状態にあるので、お望みの村を立ちあがらせるのは何でもない——と著者（バクーニン）はいう——しかし部分的な発火だけでは不十分だ。突如として全農村を立ちあがらせる必要がある」と注意している（стр. 19）。ところが農村はバラバラではんばだ。共通の生活によって生活せず、その間になんら連帯性もない。著者（バクーニン）は完全にこのことに同意し、このことのなかに「全人民叛乱を不可能にし、まひさせる主要な欠陥」をみている（стр. 20）。したがって著者（バクーニン）は青年たちに何よりもまず孤立的、地方的な農民世界の統一に従事することを提案している。著者（バクーニン）はいう。「деревни（村） волости（郷）出来れば области（州）のよりよき農民（лучшие крестьяне）をむすびつけなければならぬ。」そして「よりよき農民に、またかれらを通して、よし全人民でなくとも、すくなくとも人民の多数の最も精力的な部分につぎのことを確信させる必要がある。すなわち全人民にとって、全 деревни, 全 волости, また全 области にとって、ロシアの内外にひとつの共通な不幸が存在すること、それ故ひとつの共通の事業が存在することである。」最後に「села, волости, области がひとつの共通のプランにしたがってむすびつけられ、組織されることが必要だ。」ということである。

以上にみられるように、その任務は容易ならざる任務である。しかし以上で全部ではない「わが革命的青年の直接の任務は人民的理想の諸欠陥に反抗し、人民的意識そのものにおけるこれら諸欠陥にうちかつべく全努力を傾注することである。」（стр. 19）

われわれがすでにみてきたように、著者（バクーニン）の意見によれば、これらの欠陥は、ロシア人民の宗教的政治的宿命論、家長制的性格をもつ生活への愛着、最後に мир, община と個人との関係についてゆきすぎた共産主義的見解にあった。「諸欠陥」は「人民精神の内部」に存在し、その奥底深くに隠れている。ここにおいて著者（バクーニン）はこれら「諸欠陥」とたたかうことを青年たちに呼びかけているのだ。そうすると、当然のことながら、このたたかいは人民的世界観の根本的諸形式との衝突である。人民のよって以て立っている精神的発達段階に制約された諸形式との衝突である。つまり父から子へと全世代を通じて伝えられ、母親の乳とともに吸いこまれた諸習慣と衝突しなければならぬ。人民をしてかれらの頭からそういう考え方を放棄させるためには、固陋な習慣を変えさせるためには——個人をミールの奴隷とするところの家長制的生活様式にひきつけられている人民の感情なり本能なりを根絶するためには——人民を再教育し、人民の頭のなかにちがう脳みそをいれる必要があるではないか。しかしこのような任務が果して革命的実践綱領のなかに入りうるだろうか？ とトカチヨフは疑問を提出している。「果して革命家の仕事は人民を教育することなのだろうか？——とトカチヨフは書いている——のみならず、かりにわれわれ革命家が数十、数百でなく、数千、数百万を数えたとしても、果してかれらはこれを実現しうるだろうか？ 人民を再教育するためには、多くの世代、何十年という仕事及要求される。本当にこんな簡単なことが

わからないのだろうか？」³⁰⁾

おそらく著者（バクーニン）は待つことに賛成なんだろうとトカチヨフは述べている。「だが、おそらく、あなたは待つことに賛成なんだろう——幾十年も幾世紀も待つことに賛成なのではあるまいか？ しかしそうだとすれば、なぜあなたは《穏和な》プロパガンディストたちが唱えているような方法を是認しないのか？ なぜあなたはかれらのやり方をユートピアだといい、自分のやり方を現実的だというのか？ なぜ一方を「準備的」（«подготовительный»）と呼び、他方を「ブント的」《бунтовской》と呼ぶのか？ 人民的理想を改造し、人民に向けて人民の力の意識を吹き込み、バラバラの села, волости, области をひとつの全体にむすびつけること——一体あなたはこのことが《Вперед》の編輯者がいう、すなわち《かれらに自己の必要および要求、社会革命の手段、任務および条件を理解させるまで》人民を育てあげるといふことよりも、もっと早くもっと容易にできることだとでも思っているのか？」³¹⁾

「ところで青年の立場はどうなるのか？ 青年は何を信ずべきなのか？ 青年は漸進的にゆっくりと人民を革命に向けて準備するという道、人民的理想の拡大浄化を自己の目的とするプロパガンダの道信ずべきなのか——その道はユートピアの道で、その道をゆけば、決してどこへも到達しないだろうとしてもだ。すなわち青年はただこの道からのみ救済を待つべきだと信じなければならないのだろうか？」³²⁾

美しい理想主義と卑しい現実主義との間を右往左往していること

お互いに反目しあう立場が種々の傾向をもったひとびとによって唱えられるならばまだしも、それがそうでなくて、まったく同じ人が、同じ本のなかで、同じ頁のなかで述べているのだから妙だ…とトカチヨフはいう。しかしそれはおどろくに当たらないのだ。その原理的基礎において矛盾せる理論は必然的に矛盾せる実践的結論に達せざるをえないのだとトカチヨフは論ずる。上述の理論は常に「形而上学的理想主義」と「粗野な俗流現実主義」との間を行ったり来たりしている。この老人（バクーニン）にとって誘惑的な美女「セイレネス＝形而上学者」《сирена-метафизка》が人民のなかに、ある永遠の理想が住み、それが人民革命に意味を与え、一定の目的を与えることができる（стр. 7）とささやく。そしてこの「セイレネス＝形而上学者」はこの理想こそが無政府（Анархия）の理想であり、あらゆる外的強制から解放され、あらゆる権力の束縛を脱し、自己の個人的利益以外には何ものも知らず、また何ものも認めざる《自己》（«Я»）の完全かつ絶対的支配の理想であるところの老人に確信させるのだ。背信の美女セイレネスの言葉を信じて、かの女の空想的たわ言に迷わされた著者（バクーニン）は青年たちに向けて理想化された人民の隊列のなかに入り、即刻人民をブントに立ちあがらせ、《ブントの道に立つ》（«статья на бунтовской путь»）ことを呼びかける。ところが茲に卑しい現実主義が登場し、無作法にも形而上学者のカルタの家を掃き出してしまふ。現実主義はこういうのだ、信じてはならぬ、あれは年とった齒のぬけた婆さんだ、お前はあの装いに

30) там же, стр. 18

31) там же, стр. 19

32) там же, стр. 19

迷わされたのだ、お前にいったことはみんな大ぼらだと。たとえ人民のなかにお前が好んで「理想」と名づけているものがひとかけらでもあるとしても「その理想は本質的な欠陥に苦しんでいるので」理想の名において始められた人民運動はいまだ嘗て成功裡に終わったためしがないし、今でも成功裡に終ることはできないのだ（стр. 19）。お前はぼけた婆さんの言葉を真にうけて、あたかもわが人民はお前が考えているような《Анархия》の気分を感じているかのように想像して、ひどいまちがいをやらかしている。実際はその反対で、人民の社会観、人民によってつくられた社会生活の諸形式、人民の個人的また家族的関係、そのすべてはお前の《Анархия》とは反対の道をゆくものだ。「Община——人民の мир。それは人民の家族、人民の氏族の自然的拡大以外の何ものでもない。それ故 община において卑しむべき服従が優勢であり、したがって家族におけると同様、根本的な不公平およびあらゆる個人的権利の過激な否定がある。」（стр. 15）³³⁾

ブントの道とは何か。権力を否定しながら権力への服従を説く

経験の示すところ Анархия のために慰めとなるようなことがあまりすくないので、著者（バクーニン）はもっぱら「ブントの道」《бунтовской путь》という言葉の説明に没頭する。

「ブントの道に立つ」《статья на бунтовской путь》ということは、人民のなかへ入ってゆくことをまったく意味しないで、直ちに人民を叛乱に立ちあがらせることを意味しているように思われるのだが、実はそうでないのだからおかしいと批判する。バクーニンによると、それはつぎのようなことを意味する。すなわち人民的理想の欠陥を正すこと、つまり人民を無政府的象徴の精神において再教育すること、しかるのち「バラバラの села, волости, また области」をもひとつの強い連合（союз）, つまり「ひとつの共通のプランにしたがい、また唯ひとつの目的をもって」行動する союз, ひとつの共通の上層指導, ひとつの共通の上層権力に服従する союз に結合させることなのである。³⁴⁾

一体どうしたらいいのか伺いたいものだとかチヨフはいう。「一方あなたは青年たちに向ってあらゆる支配、あらゆる権威、あらゆる権力の害悪を人民に確信せしめよ、人民のなかには個人的権利の意識を発達せしめよと忠告するが、他方あなたはバラバラの農民世界をひとつの共通の指導に服せしめひとつの共通の目的に従わしめるひとつの全体に結合させることを勧告する。何ということだ。あなたはわが哀れなロシア人民を生まれつきの馬鹿者と思っているのだ。その人民の前にあなたはたったいま膝まずき、香を焚き、自分の神と呼んだのだ！あなたは人民の頭のなかには常識もたいしてなく、あなたのおかした矛盾なんてわかりもしないのだとでも考えておられるのかしらん？ あらゆる権力はあらゆる事業を台なしにする、というようなことをいっておきながら、その口の下で革命運動の成功のためにはなんらか共通の統一的指導、なんらかの権力に服従する必要があるという。一体そういうことを人民に無理に信じこませることができるとでも思っているのかしらん？」³⁵⁾

33) там же, стр. 19

34) там же, стр. 21

35) там же, стр. 21

「あなたはもう度をこした単純なひとか、あるいはあなたの人民にたいする偶像崇拜はまったくの偽善か卑しむべき良心のない嘘かである。」³⁶⁾

Организация (組織) と Агломерация (集合体)

かようにトカチ ョフはバクーニンを叩いて、次のような組織論を展開している。あらゆる組織は何らかの共通の指導、なんらかの中心を予想する。その中心とはそこから命令を出し、その命令の遂行を監視するものであり、バラバラの部分のひとつの全体に結びつけるものである。かかる組織はすべて連邦主義か中央集権主義の基礎の上に立っている。つまりその中心に若干全権力をもつ独裁者が坐るか、あるいはただ各地のグループの全権を委任された代表者が坐るかする。あらゆる組織は、その性質上、権威をもった組織であり、したがって反無政府主義的なものである。「どのようにしてあなたはこの組織と Анархия の説教とを調和させようと願っておられるのか？ しかし、おそらく、あなたは構成各単位のそれぞれの独立的、自立的な存在を許容する組織を夢みているのであろうか？ しかし、その場合、これは организация (組織) ではなく、 агломерация (集合体) にすぎないであろう。つまりこの агломерацияこそは正に今日農民の мир に存在するものであって、あなたがこれを организация に変えようと欲しているものなのである。」³⁷⁾

36) там же, стр. 21

37) там же, стр. 21-22